

教皇、聖母に委ねる平和への祈り



8月15日、ローマ南東カステルガンドルフォの「ピラノバの聖トマス」教会で、「聖母マリアの被昇天」のミサをささげた教皇レオ14世（CNS）

戦後80年 広島・長崎

- 教皇「被爆80年」にメッセージ 2面
- 米韓日の司教、被爆者団体代表と
核兵器廃絶と平和に向け 集会と声明 2面
- 広島・長崎での平和行事 2・3面

- 聖年「青年の祝祭」 4面
- 教皇、「聖母被昇天」の祭日に
マリアに委ねる平和への祈り 5面
- 教皇、「神は決して誰をも見捨てない」 5面
- 教皇、教会は神の愛で「燃える」 6面
- 教皇、「主の愛は憎しみに打ち勝つ」 7面
- 国内記事ダイジェスト 8面

- 主日の福音解説 9・10面
- 短歌・俳句 11面
- きょうをささげる（9月の祈り） 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。（「カトリックジャパンニュース」には下記QRコードからアクセス可）

カトリックジャパンニュース 

カトリックジャパンダイジェスト 第5号
発行＝カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

平和のため 主の手足となって 長崎



8月9日、浦上教会での平和祈願ミサで、被爆したマリア像を掲げる中村倫明大司教。
後ろには同じく原爆によって頭と右腕、両足が損傷したキリスト像が置かれている

核兵器廃絶に向け集会と声明 米韓日の司教と被爆者団体

広島



8月5日、広島で開かれた「被爆者団体と米韓日司教有志の平和集会」の参加者たち

教皇レオ14世がメッセージ 被爆80年 「武器を手放す勇気」必要

教皇レオ14世は被爆80年に向けてのメッセージを広島と長崎に送り、「まことの平和」のために「武器を手放す勇気」が求められると訴えた。

メッセージ冒頭、教皇は被爆者に向けて「深い敬意と親しみを込めて」語りかけた。「被爆者の方々が体験した喪失と苦悩は、わたしたちにとって『より安全な世界をつくり、平和の心を育てなさい』と呼びかけている大切な声です」

また広島と長崎の町が、今も核兵器の恐ろしさを伝え続けていることに触れ、前教皇フランシスコの言葉、「戦争は、いつでも人類にとっての敗北です」を思い起こすと述べる。

長崎で被爆したカトリック信者の医師、永井隆の

文章にある「愛の人とは、武器を持たない勇気ある人です」という言葉を取り上げ、「まことの平和」のために、特に「計り知れない破壊をもたらす武器」を手放す勇気が必要だと説いた。

続けて、広島と長崎は、「相手を破壊する力によって安全を保つという幻想」を捨てるよう語りかけていると指摘し、力ではなく「正義、きょうだい愛、共通善」に基づく世界の倫理をつくらなければならないと訴えた。

このメッセージは8月5日に広島、9日に長崎でささげられたミサの中で、駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教によって代読された。



8月10日にバチカンの一般謁見で話す教皇レオ14世。教皇はここでも原爆投下に言及した。「広島と長崎への原爆投下80周年は、紛争解決の手段としての戦争に正当に反対するよう全世界に再び喚起します」と強調し、戦争終結への祈りを呼びかけた（CNS）

戦後80年 広島

米韓日の司教、被爆者団体代表と 核兵器廃絶に向け 集会と声明



左側に米韓日の司教たち、右側に被爆者団体の代表たちが座り発言。平和実現の道を探った。8月5日、エリザベト音楽大学で

広島教区（白浜満司教）は8月5日と6日、「原爆投下80年 平和への希望をあらたに ～核廃絶をわたしたちはあきらめない～」をテーマに平和行事を行った。同教区は2023年の夏、核兵器の製造・開発拠点がある米国サンタフェ教区のジョン・ウェスター大司教ら米国の司教2人を迎え、同年、米日4教区（サンタフェ、シアトル、長崎、広島）は「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」を設立。以来、核兵器廃絶に向けて連携してきた。

今年の平和行事には、初めて韓国の3教区の司教らが参加し、駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教と米国・韓国・日本の枢機卿と司教25人が集った。例年行うミサや、諸宗教者を行う祈りの集いのほか、広島・長崎を訪問する米国からの巡礼団と協力して被爆者団体との「平和集会」を開催した。

「平和集会」は5日、広島市のエリザベト音楽大学で行われ、約300人の市民や学生も参加した。最初に日本原水爆被害者団体協議会（被団協）のノーベル平和賞受賞を祝った後、駐日教皇庁大使が、歴代教皇が核兵器に反対してきた歴史を紹介。続いて3カ国の司教と被爆者団体の代表らがスピーチした。

ウェスター大司教は、核兵器開発の拠点「ロスアラモス研究所」があることでサンタフェ教区には特別な責任があると述べ、地域の現状を話すとともに核兵器廃絶に向け全力を尽くそうと呼びかけた。松浦悟郎司教（名古屋教区）は、原爆投下に見られる「実験」の要素などの非人間性を指摘したほか、日本人以外の被爆者を忘れてはならないことに言及。青年らと共に諦めることなく核廃絶と平和実現に尽力したいと述べた。韓国インチョン教区のチョン・シンチョル司教は、平和は「武器を捨て、対話を行うことによって、相互の信頼関係から芽生える」と訴えた。

広島県原爆被害者団体協議会の原田浩副理事長は、被爆の悲惨さ

を2度と繰り返さぬよう語り継いできたこと、教皇フランシスコの言葉に大きな感銘を受けたことを話した。韓国原爆被害者対策特別委員会委員長のコン・ジュノさんは、日本や韓国のように多くの被爆者が出た国が、核兵器のない世界をつくるため闘い抜かなければならないと訴えた。3カ国の司教有志と被爆者団体の代表は最後に、核兵器のない世界の実現を求める共同声明を発表した。



スピーチ枢機卿「平和への新たな道」を 原爆とすべての戦争の犠牲者のためのミサ (8月6日・広島市・^{のぼり}熾町教会 世界平和記念聖堂)



8月6日午前8時15分に黙とうをささげる「原爆とすべての戦争の犠牲者のためのミサ」参加者たち（世界平和記念聖堂）

8月6日朝、広島市の世界平和記念聖堂で「原爆とすべての戦争の犠牲者のためのミサ」が行われ、米韓日の司教と約200人が参加。午前8時15分の原爆投下時刻に黙とうをささげた。米国シカゴ教区大司教ブレース・スピーチ枢機卿は、毎年8月6日が「主の変容」の祝日であることから、説教で、主の変容の光と原爆の光を対比。前教皇フランシスコが広島で示した三つの倫理的義務 — 「思い出す」「共に歩む」「守る」を軸に福音の教えを説いた。「私たち」は被爆者の証言を継承し、国境を越えて共に歩み、神の現存に守られながら、今こそ「平和への新たな道」を創造すると語った。



世代を超えて平和を語る (8月6日午前・広島市・^{えのみや}愛宮ラサール記念館)

8月6日午前は、幅広い年代の人々が平和を語り合った。広島教区の平和行事では例年、主に広島教区内のミッションスクールに通う中高生を対象に若者の集いを開いてきたが、今年は初めて「世代を超えて平和を語り合う」企画とし、学齢未満の子どもから高齢世代、巡礼者も含めて、約100人が広島市の^{えのみや}愛宮ラサール記念館に集った。広島教区青年活動企画室が準備を担当。松浦悟郎司教（名古屋教区）の講話を受け、小グループごとに分かち合った。

松浦司教は「日本人ファースト」の風潮が差別や排他的言動を助長する恐れがあると指摘し、日本国憲法前文が掲げる「全世界の国民の平和的生存権」を守る大切さを強調。「この前文を生涯かけて守りたい」と語った。

分かち合いでは「教区を超えて大勢が集ったこの場を尊く感じた」「戦争の原因は相手を殺そうとすることではなく、自分たちを守ろうとする思いなのでは」といった声が出された。



小グループで分かち合う参加者たち

学術シンポ「平和と核軍縮」開く

(8月6日午後・広島市・エリザベト音楽大学)

6日午後、学術シンポジウム「平和と核軍縮—カトリックの視点」が広島市のエリザベト音楽大学で開かれ、日米の学生を含む約

150人が参加。共に核軍縮への道を探った。主催は「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」。基調講演には米国ワシントンDC教区のロバート・ウォルター・マケルロイ枢機卿とノートルダム大学学長のロバート・ダウド神父が登壇。マケルロイ枢機卿は、教会が一貫して核兵器廃絶を訴えてきた経過を振り返った上で、前教皇フランシスコが核兵器の保有を断固として非難し、それが「今やカトリックの教えになった」と強調した。

ダウド神父は、今、多くの人が核兵器の保有を国防の有効手段として捉え始めているが、この「重要な岐路」にあって特にカトリック大学は人と国の架け橋となることが重要だと訴えた。

パネル討論では日米研究者が核政策の倫理を議論。ニューメキシコ大学学生の咲知・バーナビーさん(22)は、地元の核産業と教会の緊張も意識しながら核廃絶を考えてきた。長崎での日米学生の対話を楽しみにしていると語った。



ダウド神父とマケルロイ枢機卿



戦後80年 長崎

米日の学生が対話 平和への思い共有

(8月8日・長崎市・純心中学・高等学校 江角記念館)

広島教区に続き、長崎教区(中村倫明大司教)は浦上教会(長崎市)を中心に8月8日から10日まで平和行事を行った。広島を訪問した米国からの巡礼団も各行事に加わり、共に祈りと対話の時を持った。

原爆が投下された9日は原爆犠牲者追悼ミサと平和祈願ミサがささげられ、翌10日に行われた「ともに歩む平和の巡礼者の集い」では被爆者や青年、大学関係者がそれぞれの立場から平和への思いを語り、対話に挑んだ。また8日の夜8時から9日夕方まで、夜を通して「聖体の永久礼拝」を行った。

広島・長崎を訪問した米国の学生と日本の学生たち33人は8月8日、長崎市の純心中学・高等学校の江角記念館で「霊における会話」の手法を用いて、核兵器や平和への思いを分かち合った。

6グループに分かれて「個人的な経験の分かち合い」「他者の分かち合いで聞いたことを心に響かせる」「自由な会話」の順に自分の意見や気持ちを述べ、互いの発言に耳を傾けた。この作業を2回繰り返した後、9日の平和祈願ミサの共同祈願と、10日の「ともにあゆむ平和の巡礼者の集い」で発表する「共同声明」にまとめ上げた。

米国から来た大学4年生のブレナン・ウィルズさんは、「核兵器の歴史や被爆者の悲しみを知りたくて勇気を持って」今回の巡礼に参加。被爆者の話を聞き、原爆資料館を訪ねて「非軍事的な場所を爆撃することを正当化する理由はない」と再認識。日本の学生との対話を通じて「核兵器が次世代にまで影響を及ぼすことを学びました」と話した。

長崎純心大学2年生の川原宗一郎さんは、この日の午前中、米国の学生たちと原爆資料館を訪ねた。被害を受けた浦上天主堂の模型を見て、感情が込み上げている米国の学生の姿を目にした。「戦争への思いは国を超えて同じだと思いました」

この日の対話を主催した長崎純心大学学長の坂本久美子修道女(57/純心聖母会)は、信徒でない学生もいる中、「霊における会話」が参加者に理解されるか心配した。しかしやってみると対話によってグループの総意ができていき、「ゆるし」「尊敬」「過去を忘れない」「希望を持つ」「祈り」「愛」といった共通のキーワードが浮かび出てきたことに驚いたという。「学生たちは平和はこうやってできていくんだなと感じたのではないですか」と坂本修道女は振り返った。



学生たちはスマートフォンの翻訳アプリを駆使。真剣な対話は3時間にも及んだ



80年目の原爆さく裂時刻に黙とう

原爆犠牲者追悼ミサ(8月9日・長崎市・浦上教会)

8月9日、80年前に原爆がさく裂した午前11時2分、今年5月に米国の信者たちから贈られた小鐘が初めて浦上教会の鐘楼で鳴り渡り、原爆犠牲者追悼ミサが始まった。約350人が参加。主司式した山村憲一神父(長崎教区)は説教で、過去を振り返り続け、平和への責任を担う決心を新たにしなければと語った。



平和のため 主の手足となって

平和祈願ミサ(8月9日・長崎市・浦上教会)

9日夕には長崎カテドラル浦上教会で平和祈願ミサが行われ、約1200人が祈りをささげた。ミサを主司式した中村倫明大司教(長崎教区)は、被爆で損傷したイエス像とマリア像を示し「主が私たちの代わりに傷を負われた。私たちがキリストの手足となり、平和を実現しよう」と説いた(1面写真参照)。

ミサ後には、たいまつを手に祈りながら爆心地公園まで行進した。ベネズエラ出身の愛川かいるさん(26)は、長期の休暇を取り、



たいまつを手に行列する参加者たち

時間をかけて長崎を旅してきた。「初めて浦上天主堂でミサに参加しました。私もイエス様と同じ(平和の)道を歩きたいと思いました」と感想を話した。



被爆体験者と米日の司教や学生ら集う

ともにあゆむ平和の巡礼者の集い(8月10日・浦上教会)

浦上教会で8月10日、「ともにあゆむ平和の巡礼者の集い」が開かれ、被爆体験者と米日の司教、学生、大学職員ら150人余りが参加した。米国ニューメキシコ大学のミライア・ゴメス准教授は米国政府が行った核実験や核開発の影響で、自身の親族を含む多くの人々が被ばくした事実を話した。

高見三明名誉大司教(長崎教区)はじめ3人による被爆体験や、米日の学生が行った対話の報告と共同声明の発表、長崎地区の青年代表による平和への取り組みが話された後、米日の大学6校の学長らが平和構築における大学の役割などについて意見を述べた。

川原匠さん(32/長崎市・城山教会)は、海外から多くの巡礼者が来て祈りを共にしてくれたことを喜び、「『平和を実現したい』と心から思いました」と3日間の平和行事を振り返った。



国際

教皇、「青年の祝祭」閉会ミサで 「妥協しないで」聖性を求める

【ローマ8月3日CNS】豊かに満たされたいのちを得られるかどうかは、人生の中で喜んで人を歓迎し、分かち合うことにかかっていて、神から来ることだけを常に切望しながら生きることが求められる、と教皇レオ14世は若者たちに語った。

「皆さんはどこにいても、素晴らしいことを、聖性を願い求めてください。妥協しないでください。そうすれば、福音の光が皆さんと皆さんの周りで、日々輝きを増していくのを目にするでしょう」と教皇は8月3日、聖年の「青年の祝祭」の閉会ミサで呼びかけた。

野外ミサはローマ郊外のトル・ベルガータの広場でささげられ、7月28日から1週間続いた祝祭を締めくくった。

およそ100万人以上の参加者が広大な広場での朝のミサに集まり、前夜の晩の祈りにも参加した数十万人は広場の地面で野宿していた。

主と共に永遠への冒険に乗り出す

教皇レオ14世はミサの説教で、改めて聖体の重要性を強調し、「主がご自身をたまものとして私たちに与え尽くす秘跡なのです」と説明する。

復活された方キリストが「私たちの人生を変えて、私たちの気持ちと願いと願いを明るく照らしてください」。

「私たちは、何もかもが当然のように整っていて動きのない人生のためにつくられているではありません。求められているのは、愛のうちに自らを与え尽くすを通して、絶えず新しくされる生き方なのです」と教皇は続ける。

教皇は野の花を引き合いに出して説明する。小さな茎が枯れて折れ曲がったり、踏みつぶされたりしても、一つ一つの花は「すぐに続いて芽を出す花に取って代われ、先の花が地上で枯れることによって養分と肥料が十分に与えられます。こうして野の花たちは、常に新しくなることによって、生き残っていきます」。

「こうして私たちは、作り物の現実からは得られない『より良い』ことを絶えず願い求めていくのです。私たちはこの世の飲み物では癒やせない深くて焼けるような渇きを覚えます」と教皇は説明を続ける。「このことを意識して、安っぽいまいが物で渇きを癒やそうとすることで、私たちの心を欺かないように気を付けましょう」

教皇レオ14世は若者たちに、そうした内面の切望に耳を傾けるよう促し、「このことを踏み台にしましょう。つま先立ちをして背伸びする子どもたちのように、神との出会いの窓を通して見るためです」と勧める。「そして、私たちを待ってください、私たちの魂の窓を優しくたたいてくださる主のみ前に立つのです」

「それは本当に素晴らしいことです。特に若い時に、皆さんの心を大きく開いて、主に入って来ていただき、主と共に永遠の広がりに向かうこの冒険に乗り出すためです」と教皇は付け加えた。

「キリストに倣って」成長する時とする

教皇レオは英語で短く語る。「私たちの

心のうちでは重要な問いが燃えさかります。私たちが無視できない真理の必要性です。そうして自問することになります。真の幸せとは何か。人生の真の意味とは何か。意味のないことやつまらないこと、月並みなことに捕らわれてしまうことから私たちが解放してくれるのは何か」

「買うこと、ため込むこと、消費することで満足は得られません」と教皇は続ける。「何よりも大切なのは、喜んで人を迎え入れ、分かち合うことです」

教皇は若者たちにこう呼びかける。「私たちは目を上げて、天の高みにまなざしを向けましょう。『上にあるもの』(コロサイ3・2)を求めるのです。世のあらゆることは、私たちが神と兄弟姉妹と愛のうちに一致させてくれる時にだけ意味があることを悟りましょう。私たちが、『思いやりと優しさ、謙遜と柔和さと忍耐、ゆるしと平和のうちに、全てキリストに倣って』成長する助けとなります」



8月3日、ローマ郊外のトル・ベルガータでささげた「青年の祝祭」を締めくくるミサを終え、広場から出発する間、若者たちとの別れを惜しんで手を振る教皇レオ14世(CNS)

日本からの巡礼団も参加

7月28日から8月3日まで開かれた「青年の祝祭」には、日本からの巡礼団としても18歳から30歳の青年たち40人が参加し、共に巡礼の日々を過ごした。2人の司教と7人の司祭が同行した。

広島・幟町教会から参加した益田なおさん(28)は、「教皇と共に祭壇に向かい、それぞれが神様と静かに向き合った晩の祈り。共同体の力を感じる特別なひとときでした。祈りの中で浮かんできた『早くミサにあずかりたい』という思いは、忘れたくありません」と感想を述べた。

埼玉・所沢教会の高橋新悟さん(30)は、「ローマでの四大バジリカや教皇ミサを通して夢のような時間を過ごすとともに、

人々の信仰が長い間そこにあることをはっきりと実感しました。驚いたのは、今回参加した若者たちが自分と同じように傷つき、迷い悩みながらも一歩踏み出したことです。日本の若者が置かれている状況は決して明るくはないですが、みんなで信仰を持って歩むことができると確信しました」と話した。



日本からの巡礼団。サンピエトロ広場で

国 際

教皇、「聖母被昇天」の祭日に マリアに委ねる平和への祈り

【カステルガンドルフォ（イタリア中部）
8月15日CNS】マリアが神のお告げ
といのちと愛に「はい」と答えて受け入
れたことは、「現代の殉教者や信仰と正義、
柔和さと平和の証し」に受け継がれてい
ると教皇レオ14世は、「聖母マリアの被
昇天」の祭日のミサで指摘した。

ローマの南東カステルガンドルフォの
中央広場に面するピラノバの聖トマス教
会で8月15日、教皇はミサをささげた
後、近くの教皇夏季別荘の門の前で「お
告げの祈り」を主宰した。

ミサと「お告げの祈り」は、米国のド
ナルド・トランプ大統領とロシアのウラ
ジーミル・プーチン大統領がアラスカで、
ロシアによるウクライナ侵攻の終結につ
いて会談する数時間前にささげられた。

主のいつくしみに平和への道

教皇レオ14世は「お告げの祈り」を唱
えた後に、広場に集まった約2500人に、
こう語りかける。「私たちは今日、天に上
げられたおとめマリアの取り次ぎに、私た
ちの祈りを委ねたいのです。御母であるマ
リアは、ご自分の子どもたち、特に幼い子
や弱い立場にある人をさいなんている悪に
よって苦しんでおられます」

「今日も、私たちは世界中にはびこる
暴力の前に無力感を覚えています。あら
ゆる人間性への促しに対して、ますます
耳を貸さず、関心も示さない暴力です。
それでも私たちは、希望を捨ててはいけ
ません。神は人間の罪よりも偉大な方だ
からです」と教皇は強調する。



8月15日、カステルガンドルフォの「ピラノバの聖トマス」教会で、「聖母マリアの被昇天」のミサをささげた教皇レオ14世(CNS)

「私たちは紛争と武器に訴える論理に屈服
してはいけません」と教皇は続ける。「マリア
を通して、私たちは信じています。主は常に
ご自分のいつくしみを思い起こし、その子ど
もたちを助けに来てくださることを信じてい
ます。主のいつくしみのうちにだけ、私たち
は平和への道を見いだすことができるのです」

「マニフィカト」で新しくされる

当日のミサの福音箇所では、マリアが
賛歌「マニフィカト」で、神が自身に偉
大なことをなさったと宣言し、神が既に
貧しい人や抑圧された人を救う約束を果
たされていることへの確信を示す。

今日でも、マリアの賛歌は「身分の低

い人や飢えている人、神の忠実なしもべ
の希望を強めてくださいます」と教皇は
説明する。「その人たちは幸いな男女で、
苦難のうちにあってさえも、目には見え
ないことを既に理解しています。権力あ
る者はその座から引き下ろされ、富める
者は空腹のまま追い返され、神の約束は
果たされます」

悪や利己主義、「貧しい人や弱い立場
の人の軽視」が仕方のないこととされて
しまう世界にあって、教会は「弱い立場
にある信者たちのうちに生きていて、そ
の人たちの『マニフィカト』のおかげで
新しくされています」と教皇は強調する。

「私たちの時代にあっても、貧しい人
と迫害を受けているキリスト教共同体、
紛争地での優しさとゆるしの証し、分断
された世界で平和を実現し、橋を架ける
人々は、教会の喜びです」と教皇は続け
る。「その多くは女性たちなのです」

主の愛だけがいのちを勝利させる

教皇レオ14世は説教を結ぶに当たっ
て、全てのカトリック信者がこうした模
範に倣い、マリアと共に「力ある方が、
わたしに偉大なことをなさいました」(ル
カ1・49)と歌うようにと祈った。

「恐れることなく、いのちを選びましょ
う。危うさを伴い、賢明さを欠くように
思われるかもしれませんが。多くのささや
きを耳にするでしょう。『どうしてそんな
ことを。放っておけばいいのに。自分の
ことを考えなさい』。これは死の声です」

「けれども、私たちはキリストの弟子で
す。そして、この私たちの時代に、私た
ちの魂と体を突き動かしてくださるのは、主
の愛なのです。この愛、そしてこの愛だけ
が、いのちを広めて、勝利させてくださ
るのです」と教皇は付け加えた。

教皇の一般謁見講話 神は決して誰をも見捨てない

【バチカン8月13日CNS】たとえ人が神の
愛に背いたとしても、神は決して誰をも見捨
てることはない、と教皇レオ14世は強調する。

キリスト教的な「希望は、ここにあります。
たとえ私たちが神に背いても、神は決して
私たちを見捨てることはないのです。私た
ちが裏切ったとしても、神は私たちを愛す
るのを決してやめません」と教皇は8月13
日、バチカンで開いた一般謁見で語った。

教皇レオ14世はバチカンのパウロ6
世ホールに着くと、英語とスペイン語と

イタリア語で、謁見は同ホールと聖ペト
ロ大聖堂内の2カ所で開き、人々が強烈
な日差しの下で外にいないで済むように
すると説明した。

教皇は一般謁見の後、7月に夏休みを過
ごしたローマの南東30キロほどのカステ
ルガンドルフォの教皇別荘に向かい、教皇
庁広報局によると、8月19日まで滞在する。

信仰が罪から抜け出す道を示す

教皇レオ14世は一般謁見でイエスの



8月13日、一般謁見のためパウロ6世ホールに着き、手を振る教皇レオ14世(CNS)

最後の日々についての連続講話をしており、今回は特に「最後の晩さん」でイエスが弟子たちの一人が裏切ることになる

国 際

と明かしたことに触れた。

イエスは他の弟子たちの前でユダを非難することも辱めることもなかった、と教皇は指摘する。そうされたのは、「愛が真実であるのなら、その愛を示すには真実を告げるしかない」ことを教えるためだった。

福音書（マルコ14・19）では、弟子たちは代わる代わる「まさかわたしのことでは」と応じる。

教皇は説明を続ける。この応答は「おそらく、私たちが自問できることの中で

最も正直なものではないでしょうか。それは潔白な者による問いではなく、自分の弱さが分かっている弟子の問いだからです。それは罪びとの叫びではなく、愛されたいと願っていながらも、自分が相手を傷つけることもあると分かっている者のささやきです。この気付きのうちに、救いを求める旅が始まります」。

救われるためには、自分が救いを必要としていることを認めなければならない。

ただ、それと同時に、キリストの弟子は「何があっても愛されていることを感

じ取り、悪は確かにあっても、最後に勝つことはないことを知る」必要がある、と教皇は指摘する。

「私たちが自分の限界を認めて、裏切られるキリストの苦しみに触れさせていただけなら、私たちはもう一度生まれ直すことができます」と教皇レオ14世は説明する。「信仰は私たちが罪を犯す可能性から守ってはくれません。けれども必ず、私たちにそこから抜け出す道を示してくれます。それはいつくしみの道です」



8月17日、ローマ南東カステルガンドルフォの「ラウダート・シ村」で主催した昼食会で、アルバーノ教区カリタスの支援を受ける人々にあいさつする教皇レオ14世（CNS）

教皇、教会は神の愛で「燃える」 貧しい人とのミサと昼食で強調

【ローマ8月17日CNS】教皇レオ14世は貧しくされている人々と1日を過ごし、全てのカトリック信者に向けて、自分たちの小教区が全ての人を歓迎し、神の愛で「燃える」ようにすることを求めた。

「私たちは主の教会、貧しい人の教会です。全ての人が同じく大切に、皆が活発に参加します。一人一人が個別に神のみことばを携えています」と教皇は8月17日、イタリア中部アルバーノ・ラツィアーレの「ロトンダの聖母」巡礼所でささげたミサで強調した。ミサにはアルバーノ教区カリタスの援助プログラムで支援を受けている人とボランティア110人が参加していて、住む家のない人や同カリタス運営の家庭向けの避難所で暮らす人もいた。

「私たちの教会や私たちの家、私たちの人生から、主を追い出さないようにしま

しょう」と教皇はミサの説教で呼びかけた。「そうではなく、貧しい人のうちに主を迎え入れましょう。そうして私たちは自分たちの貧しさと折り合いを付けることもできます。この貧しさは、私たちが何としても安心と安全を求めようとする際に、恐れ、否定することから生まれています」

教皇レオ14世は、この朝のミサの後、3キロほど離れたカステルガンドルフォに移動して「お告げの祈り」を唱えた後、カリタスから支援を受ける人々やボランティアたちとの昼食会を主催した。

昼食会が開かれたのは、教皇フランシスコが教皇夏季別荘の庭園内で総合的な（インテグラル）エコロジーの教育と養成を目的に創設した「ラウダート・シ村」だった。

教皇レオ14世は丸テーブルに着いて、同席したのはペルーからの移住者で夫と

子どもたち2人を伴っていたロサバル・レオンさんとローマ郊外で一人暮らしをしている85歳のガブリエッラ・オリベイロさんだった。

偏見や警戒心、恐れを焼き尽くす火

教皇は午前中のミサの説教で、支援を求める立場でも支援する立場でも、教会内では「一人一人が他の人にとってのたまものです。私たちは壁を打ち壊しましょう」と呼びかけていた。

教皇は世界中のカトリック共同体で、「出自や経済的状況、心理的または感情的な状況が違う人々の間の出会いを進めるために働く人たちに感謝しています」と語った。「共にあることによってだけ、最も弱い立場にある人にも完全な尊厳がある一つのからだを形づくることによってだけ、私たちは真のキリストのからだ、神の教会になるのです」

当日の福音箇所（ルカ12・49～53）は、こう始まる。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」

教皇レオ14世は指摘する。イエスが言っておられる火は、「武器の火ではなく、他の人々を焼き尽くす言葉の火でもありません。違います。そうではなく、愛の火なのです。それは身を低くして奉仕し、無関心には思いやりで応じて、横暴には優しさで応じる愛です。善意の火で、武器のようにお金はかからず、無償で世界を新しくできる火なのです」。

それに対する反応は、「誤解や嘲笑、迫害さえあるかもしれません。それでも、私たちのうちに火をともしること以上に大きな平和はありません」と教皇は付け加えた。

教皇レオ14世は祈る。カトリック信者が、イエスの火を受け入れて、その火が「偏見や、キリストの貧しさを人生に帯びている人々をいまだに疎外している警戒心と恐れを焼き尽くしますように」。

国 際

教皇の一般謁見講話 主の愛は憎しみに打ち勝つ

【バチカン8月20日CNS】イエスの愛とゆるしは、苦しみや裏切りがあることを否定はしないが、悪が勝利することを許さない、と教皇レオ14世は説く。

「ゆるすということは、悪の存在を否定することを意味するわけではありません。さらなる悪を防ぐのです」と教皇は8月20日、バチカンのパウロ6世ホールで開いた一般謁見で語った。

「何も起こらなかったと言うのではなく、恨みが未来を決めることがないように、できる限りのことをするのです」と教皇は説明する。

イエスの最後の日々についての講話を続ける教皇は、今回は特に「福音の中でも最も衝撃的で輝かしい行いの一つ」について扱った。イエスは「最後の晩さん」の際に、ご自分を裏切ることを承知の上で、ユダにパン切れを与える。

「それは単なる分かち合いの行いではなく、それ以上のことです。最後まで諦めない愛の試みだったのです」と教皇レオは指摘する。

「キリストの心を理解する鍵が、ここにあります」と教皇は続ける。「拒絶や失望、恩知らずな行いに遭ってさえも、立ち止まらない愛です」

「主の愛は、憎しみよりも強いのです」

愛する力が消えてしまうのを防ぐ

教皇はさらに説明を続ける。イエスは「ご自分の愛が、裏切りという最も痛ましい傷を受けなければならないことをご存じです。そして、身を引くのではなく、相手を非難することも、ご自分を守ろうとすることもなく、愛し抜かれます。（ユダを含む弟子たち全員の）足を洗い、パン切れを浸して与えるのです」。

ユダは渡されたパン切れを受け取るが、その意味を理解することはなかった。そして「サタンが彼の中に入った」（ヨハネ13・27）。「そのパン切れは、私たちの救いです。神があらゆることをしてくださることを告げているからです。本当にあらゆることを、私たちが拒絶する時でさえも、私たちに近づくためにしてくださるのです」と教皇は強調する。

「イエスはパンを与えるという単純な行いによって、どんな裏切りも、より大きな愛のための場として選ばれるのなら、救いの機会となることを示しておられます」と教皇は説明する。「悪に屈するのではなく、悪に善で打ち勝ち、私たちのうちにある最も真実なものである愛する力が消えてしまうのを防ぐのです」

ゆるしを与える人は自由になる

「イエスの愛は、苦痛の存在を否定はしません。ただ、悪が勝利することを許しません」と教皇は強調する。「これはイエスが私たちのために成し遂げてくださる神秘です。そして私たちも時として、

この神秘に関わることを求められます」

「私たちも、痛みと困難を伴う闇の時を経験します。魂の闇、失望の闇、誰かが私たちが傷つけるか、裏切る闇の時です。こうした時に襲いかかる誘惑が、自分に閉じこもることや自分を守ろうとすること、仕返しをしようとすることです」

「けれども主は私たちに、いつも別の方法があるという希望を示してください」と教皇はさらに続ける。「信頼の沈黙で応じるのです。そうして私たちは、愛を退けることなしに、尊厳を保って前に進むことができます」

「私たちは今日、ゆるすことができる恵みを願いましょう」と教皇は呼びかける。「イエスが教えておられるように、愛するとは、たとえそれが裏切りでも、相手の自由に任せることを意味します。そして、決して忘れてはいけないのは、その傷ついて、道に迷ったかのような自由さえも、暗闇の策略から逃れ、善の光に引き戻されるのを信じることです」

教皇レオはこう付け加える。「たとえ、その相手がゆるしを受け入れなくても、たとえ無駄なように思えても、ゆるしはそれを与える人を自由にしてくれます。恨みの感情を取り払い、心の平安を取り戻して、われに返らせてくれます」



8月20日、一般謁見の後、パウロ6世ホールで修道女と神父たちにあいさつする教皇（CNS）

「被造物を大切にするためのミサ」 式文と朗読箇所 邦訳公表

日本カトリック司教協議会は8月15日、バチカンの典礼秘跡省が新たに制定した「被造物を大切にするためのミサ」の式文と聖書朗読箇所の邦訳を公表した。7月3日に発表されたものを日本カトリック典礼委員会が翻訳し、常任司教委員会が承認したもの。式文は特に「すべてのいのちを守るための月間」（9月1日～10月4日）に用いることが勧められている。



『シノドス実施ステージの旅程』 日本語版発表

『シノドス実施ステージの旅程』の日本語版が8月22日、カトリック中央協議会のウェブサイトで発表された。

「ともに歩む教会」を目指して2021年から行われてきたシノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会は24年に閉幕したが、全世界の教会が話し合い、学び合い、分かち合い、祈り合ってきたシノドスの道を今後も続け、シノドス「最終文書」

による提案を実践していく「実施ステージ」に進むことが確認されている。

今回発表された『シノドス実施ステージの旅程』は、実施ステージとは何か、その目的は何か、誰が参加するのか、「最終文書」



にどう取り組むのかなど、教皇庁シノドス事務局に寄せられた質問に答えており、28年に開かれる「教会総会」までの道筋を示している。



国内



「平和の鐘」の音を聞きながら黙とうをささげる諸宗教の代表者たち。左から2人目が大塚喜直司教。5人目が駐日教皇庁大使(写真提供=天台宗)



今年5月26日、都内で開かれた集会での前川彰司さん。翌日は東京・麹町教会のミサに参加した。(写真提供=イエズス会社会司牧センター)



参加者たちは大分カテドラル(大分教会ザビエル聖堂)で記念ミサをささげて殉教者の信仰をしのんだ。中央が森山信三司教



金沢医科大学病院(石川県)で開催された「生命倫理学・医学人文学研究会」の最後に会場からの質問に答える秋葉悦子さん(右端)ら発表者5人



7月17日、長崎・浦上教会で行われた祝福式で小鐘に献香する長崎教区の中村倫明大司教(写真提供=カトリック長崎大司教区)

諸宗教者が共に平和祈る 比叡山宗教サミット38周年

仏教、キリスト教、イスラム、神道など、多様な宗教の指導者らが共に平和を祈る「^{ひえいざん}比叡山宗教サミット38周年『世界平和祈りの集い』」が8月4日、比叡山(大津市)で行われ、約450人が参加した。

祈りに先立って行われた式典では、昨年ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会(被団協)の代表委員、田中熙巳さん(93)が講演。改めて「核兵器で国は守れない」と訴えた。

カトリックからは駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教と大塚喜直司教(京都教区)が参加。大使が、教皇庁諸宗教対話省長官のメッセージを代読した。メッセージは、このサミットが始まるきっかけとなった1986年のイタリア・アッシジでの祈りの集いの精神は、今こそ重要だと強調した。



「前川彰司さん無罪確定」受け 松浦司教が声明

1986年に福井市で女子中学生を殺害したとされた前川彰司さん(60/福井教会信徒)の無罪が8月1日、確定した。これを受け、福井県を管轄する名古屋教区の松浦悟郎司教は即日、「教区の皆さま」に向けて声明を発表し、無罪確定を喜ぶとともに、「^{えんざい}冤罪を生みやすくしている」再審制度の問題点にも言及した。前川さんは有罪判決の2カ月後にカトリックの洗礼を受けている。

松浦司教は、北陸を訪れる機会に、たびたび前川さんと顔を合わせてきた。



大分地区殉教祭 受け継いだ信仰を日々証しする

大分教区(森山信三司教)では毎年、迫害を受けたキリシタンや殉教者ゆかりの各地区で五つのキリシタン史関連の行事が行われている。聖年に当たる今年、これらを一つに集め、大分地区全体で殉教者を記念する初の試み「大分地区殉教祭」が7月21日、大分カテドラル(大分ザビエル聖堂)で行われた。大分キリシタン史の解説と五つのキリシタン史関連の行事を紹介するプレゼンテーション、記念ミサが行われ、参加した220人余りの司祭、修道者、信徒らは、郷土の殉教者たちに思いをはせた。



人間の尊厳守られる医療を 医師・学者らが研究会

教皇庁生命アカデミー正会員の秋葉悦子さん(富山大学名誉教授)の企画による「生命倫理学・医学人文学研究会」が7月19日、金沢医科大学病院(石川県)で開催された。人間の尊厳が守られる医療現場を実現しようと、医師・研究者らが始めた新たな試みだ。生命アカデミー若手会員の医師、法学者やIT企業役員など18人が参加した。発表では、人間の尊厳を巡る医療現場の悩みや、国の科学技術政策にも見られる「超人間主義」(トランスヒューマニズム)の問題が共有された。



米国の信徒から贈られた小鐘 浦上教会で祝福式

長崎市の浦上教会で7月17日、長崎教区の中村倫明大司教^{みちあき}司式による小鐘の祝福式が行われ、司祭・信徒ら約120人が参加した。小鐘は今年5月、原爆投下国である米国のカトリック信徒らから同教会に贈られた。旧浦上天主堂には、二つの鐘楼に大鐘と小鐘の1対がつるされていたが80年前の8月9日、原爆が投下されて小鐘は大破。がれきの中から見つかった大鐘は、現在も南側の鐘楼で祈りの時を告げている。大破した小鐘は現在その時の姿のまま、同教会原爆遺物展示室に保存されているが、このことを知った米国の信徒らが小鐘と同型の鐘を復元し、同教会に寄贈した。

中村大司教は、この小鐘が戦争や核兵器がもたらした惨劇に対するゆるしと和解の印であり、原爆や戦争の犠牲者への追悼であり、世界平和に向かう希望の証しでもあると話した。



主日の福音解説

9月7日（年間第23主日）
ルカ 14・25－33
被造物を大切に作る世界祈願日

家族を憎むか？

今週の福音でイエスは憎むことを命じておられる。愛することを命じるというのであれば理解もできるが、弟子になろうとする者に向かって「憎め」とおっしゃる。しかも他ならぬ家族を憎めとおっしゃるのだから、勘弁してほしいと誰もが思うのではないか。「もし、誰かがわたしのもとに来るとしても、父、母、…を憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」（ルカ14・26）と語るイエスの言葉には、多くの人が戸惑いを覚えるであろう。

新共同訳聖書で「憎む」と訳されているギリシャ語のミーセオーは辞書を引くと確かに「憎む」という訳が付けられている。従って、大切な事は今日の文脈においてどう理解するかという解釈の問題になる。

まさか、感情としての憎しみを家族に向けよという意味でもあるまいとの予測を立てながら、恐る恐る手元の注解付き聖書を開いてみると、次のように説明されている。ヘブライ語には比較級がないので「より少なく愛する」を言い表すためには、反対語の「憎む」が用いられる。新約聖書の該当箇所でも、こうした表現法が踏襲されていると。つまり、イエスを愛するが故に、家族を少なく愛する意味だとされている。

「家族を少なく愛する」という説明文に多少ひっかかりを覚えながらも、さらに考えを進めていくうち、以前、NHKラジオのアーカイブ番組で聴いたアイヌ語研究者の金田一京助の話思い出した。金田一は大学生時代にアイヌ語と出会い、卒業後も研究を継続する。その間、結婚も果たすのだが、薄給故、研究生活だけでは家族を養うことができない。そんな矢先、父を亡くす。当時を語る金田一の肉声には鬼気迫るものがあつた。

「自分の給料でおいしいご飯の一つもごちそうできなかった。父をも犠牲にしたこの仕事、中途半端で終わるまい」。その後の金田一の活躍は万人の知るところである。

学問でも芸術でも、あるいはその他のどんな道でも、それに打ち込むことで家族を犠牲にする例は古今東西、枚挙にいとまがないであろう。そう考えると宗教だけが、またはキリスト教だけが特別ではないと言えなくもない。従って、あまたの人が避けがたい現実として受容してきたことを、イエスは多少過激な表現でなおかつ先行的に言語化したと解釈できる。「私の後に従いたい者は、家族を憎め」と。

イエスは従う者に覚悟を求めておられる。しかし、家族を憎んだ先にあるのは、実は新しい家族の構築であることもまた忘れてはならない。イエスを中心とした新しい家族の広がり、すなわち教会の広がりであり、教会の一員になるとは、具体的にはこれまでの関係を新しく規定し直すことなのである。

それ故、イエスの言葉は家族自体の否定ではなく、むしろ新しく神の家族をつくろうというわれわれに向けられた招きなのである。



くまがわゆきのり
(熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会)

9月14日（十字架称賛）
ヨハネ 3・13－17
祖父母と高齢者のための世界祈願日

称賛の意味

「十字架称賛」という祝日は、イエス・キリストがわたしたちの罪を取り除き、救いの恵みを得させるために、十字架に付けられ、高く上げられたことを祝う日です。ですから、キリストの十字架はわたしたちの救いを意味するものです。

今日の福音はヨハネ福音書3章に登場するイエス様とニコデモの対話の一部分です。この物語は他の福音書には登場しません。つまり、ここに用いられる多くの象徴はヨハネ福音書ならではの特徴であり、その一つが「持ち上げられる」ということです。

このため今日の福音は、旧約においてモーセが青銅で蛇を持ち上げたことを思い起こさせています。旧約におけるその物語は今日の第1朗読で読まれましたが、次の通りです。イスラエルの民は約束された地に向かっていく途中、耐え切れなくなって不平を言い出しました。すると、主は炎の蛇を送り、たくさんの人々が蛇にかまれて死んでしまいました。それを見て民は自分たちの罪に気づき、悔い改めてモーセに蛇を取り除くように願い、モーセは民のために主に祈りました。その時、神がお選びになった方法は願いの通りに蛇を取り除くのではなく、青銅で蛇を造り、旗竿^{ざお}の先に掲げることでした。そして蛇にかまれた時、その蛇を仰いだ人は命を得ることができたのです。

この物語が新約において再現されます。ところが、今回は青銅で造った蛇ではなく、生きておられる神ご自身が旗竿に掲げられます。この旗竿が十字架であり、死ぬ運命に置かれている人々はその十字架に付けられた神を見て信じることによって死なずに生きることです。そのような意味で、イエス様は「人の子も上げられねばならない」と言われたのです。

ここで、わたしたちは「称賛」の意味に気がきます。「十字架称賛」と翻訳されたこの祝日のラテン語の名称は「^{エグザルタツィオ}Exaltatio^{サンクテクルーチス}Sanc-tae Crucis」で、「称賛」と訳された「Exaltatio」の本来の意味は「持ち上げる」ことです。聖なる十字架をなぜ持ち上げるのでしょうか。旧約で蛇を掲げたことも、新約でイエス・キリストご自身が十字架に付けられて上げられたことも、結局人々が死に打ち勝ち、永遠の命を得るためです。そのため今日イエス様は最後にこう言われます。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」（ヨハネ3・17）。

従って、わたしたちが「称賛」する目的は、この「称賛」を通して人を生かすためです。そしてわたしたちが皆キリストのうちに永遠に生きるためでもあります。すなわち、生きるために、また人々を生かすために、そして永遠の命にあずかるために、わたしたちは「十字架を称賛する（持ち上げる）」のです。

(ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会)



主日の福音解説

9月21日（年間第25主日）

ルカ 16・1－13

または 16・10－13

あなたは友となりなさい

今日の第1朗読で、神様は人が不正に手を染め、人々を貧しい状態に追いやり、抑圧するようなことを忘れないと誓っています。福音では不正や悪いことをして友をつくりなさいとは教えてはいません。この世の富である経済力や金銭で友をつくったところで真の友情が生まれるでしょうか。今の自分にできることで友をつくることの大切さを教えています。

福音のタイトルも「不正な管理人」ではありません。聖書原文にはそもそもタイトルはついていません。

管理人は主人の信頼を失い、管理の職を剥奪されそうになります。これからどうやって生きていけばいいのかと、路頭に迷い、もがき苦しみ、人生のどん底を味わおうとしています。その中で自分の無力さと人に見られたくない自分の恥ずかしさを見ることになります。「自分はもう誰からも必要とされていないんだ」と。

「人間にとって、いちばんひどい病気は
だれからも必要とされていないと 感じることです」
聖テレサ（コルカタの）おとめ（マザー・テレサ）

自分のせいで、人に迷惑をかけて居場所がなくなり、独りになる。彼は生まれて初めて自分の周りの人々に目を留めます。そして気付くことになります。「わたしの周りに同じように負い目を感じ、それにもがき苦しんでいる人々がいる」「一生懸命頑張って、力を出し尽くし、孤独のうちに人生を諦めている人々がいる」と。
「キリストは、貧しい人や病気の人、罪びとや差別された人を思いやり、重荷にあえぐ人、希望を失った人の友となってくださいました」（『種々の機会のミサの奉献文〈試用版〉』種々の機会のミサの奉献文 四〈貧しい人の友、イエス〉から抜粋）。ミサで、わたしたちはイエス様の歩みに、心を合わせます。



管理人も自分と同じ痛みを持った人々の友となることで、イエス様とも友となることを知りました。イエス様は今日も新しい友をつくるために、祈り、歩まれています。苦しむ人々と一緒にいる、友となる。神様がわたしたちに与えてくださったとこしえの住まいです。

人々の小さな声、見えない痛みに敏感でありなさい
そうすれば、大きな苦しみ、悲しみを抱えた人々の友となることができる

主人は管理人に「お前にはもう管理は任せられない」と言いました。

神様は代わりに、イエス様と一緒に苦しむ人々の友となる召命をお与えになります。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

9月28日（年間第26主日）

ルカ 16・19－31

世界難民移住移動者の日

門が淵に変わるとき

金持ちと貧しいラザロのたとえ話が本日のルカ福音書の内容です。

金持ちとラザロの生前の様子が詳しく説明されています。金持ちは「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らして」いました。

一方のラザロは「金持ちの門前に…横たわり、その食卓から落ちる物」で飢えをしのぎたいと思っていました。「犬もやって来ては、その（ラザロの）できものをなめた」とありますように、彼は貧しかっただけではなく、惨めな状態に置かれていました。

この二人の境遇が死後に逆転します。

ラザロは天使たちによってアブラハムの元（天国）に連れて行かれます。金持ちは陰府でさいなまれています。



金持ちはラザロを遣わして自分の苦しみを和らげてほしいとアブラハムに懇願しますが、あっさりと断られてしまいます。生きている間に金持ちは良いものをもらい、反対にラザロは悪いものをもらっていたのだから、今度はラザロが慰められ金持ちは苦しむのだとその理由が述べられます。

しかもラザロと金持ちとの間には大きな淵があって行き来ができないことも明らかにされます。

興味深いのは、このたとえ話で貧しいラザロには名前があり、金持ちにはそれが無いことです。イエスが語った多くのたとえ話に出てくる登場人物の中で、名前があるのはラザロだけだそうです。神のまなざしはどのような人に注がれているのかが分かります。

また、生前、金持ちとラザロを隔てていたのは門でした。ですから、金持ちは門を出入りしていくだけでも貧しいラザロに助けの手を差し伸べることができたはずなのです。しかし、金持ちは何もしてませんでした。無関心だったからです。

たとえを通してイエスは無関心という行為に目を向けさせます。

「門」と「淵」に象徴されていますように、相手への無関心が積み重なると、それがやがては互いに行き来ができないほどの大きな隔てになってしまうことを示唆しています。とくに弱者、貧しい者に対する無関心や鈍感さがいかに罪深いことなのかということにイエスは気付かせようとしています。

無関心という生き方に陥らないためには、何よりも神のことに耳を傾けることが大切だとたとえ話は締めくくられています。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

「祖父母と高齢者のための世界祈願日」を
迎えるに当たって

教会から カトリックジャパンダイジェストを届けるために

教会は毎年、「祖父母と高齢者のための世界祈願日」を祝います（日本では9月の敬老の日の前日の日曜日）。2021年にこの祈願日を定めた前教皇フランシスコは、最初のこの祈願日のためのメッセージの中で、「あなたと同じ高齢者であるわたしからあなたに」として、こう述べています。「教会はあなたを案じ、あなたを愛していて、あなたを独りにしておきたくはないのです」

今年3月末、日本の司教団は週刊カトリック新聞を休刊とし、ニュースの配信をインターネットで行うよう転換しました。同時に司教団は、インターネットの利用が難しい方のために、毎月1度、紙媒体での発行も継続することを決めました。それがこの「カトリックジャパンダイジェスト」です。

カトリック新聞を3月末まで購読されていた個人の方には、これ

までの感謝を込めて6月までの3回分をお送りしてきましたが、7月からは各小教区に送る中から受け取っていただいています。ただご高齢の方をはじめ、教会に足を運べなくなっている方々もいらっしゃる。その方たちの中には、「カトリックジャパンダイジェスト」を通して、教皇様の言葉や教会のニュースを読みたいと望んでいる方たちがおられます。教会の大切な一員であるその方々に、教会から、この「カトリックジャパンダイジェスト」が届くよう、ご配慮いただきたいのです。各小教区から郵便物を送る機会があれば、ぜひ合わせてお送りください。そしてできることなら、その方たちの所に出向き、目を合わせ、同じ信仰を生きる仲間として言葉を交わしていただければ幸いです。特に、一人で生活をしておられる方には安否確認も含めて直接手渡ししていただけますようお願い致します。

今年の「祖父母と高齢者のための世界祈願日」は9月14日です。その方たちを「案じ」「愛して」「独りに」しないために。

日本カトリック司教協議会 広報宣教司教委員会委員長 勝谷太治司教



きょうをささげる

(教皇による祈りの世界ネットワーク)

9月

【教皇の意向：すべての被造物と私たちとの関係】

聖フランシスコの霊性にならい、神に愛され尊重されるべきすべての被造物と私たちとの関係が、互いに影響を及ぼし合っていることを体験できますように。

【日本の教会の意向：高齢者】

高齢者のこれまでの労苦がねぎらわれ、いただきたいのちを神の恵みのうちに受け取ることができすように。

アッシジの聖フランシスコは太陽を兄弟、月や星を姉妹と呼び、また風や火を兄弟、水や大地を姉妹と呼びました。私たちは「ともに暮らす家」地球の海や川、山や大地というあらゆる自然、また微生物から植物、動物に至るあらゆる命と密接につながりを持っています。私たちの命はこのつながりなしに存続することはできません。聖フランシスコは死も私たちの姉妹と呼んでいます。生も死も命の大きな循環の中にあり、それら全ては神の愛に包まれています。私たちは神の愛に応えて、あらゆる自然を大切にし、あらゆる命の営みを慈しむようにと呼びかけられています。全ての被造物を尊重する心を養うとともに、かけがえのない地球環境を守るために一人一人が祈り、できることを行っていきましょう。

*

日本では高齢者の孤独死が去年は約5万8千人に上っています。少子高齢化が進む日本社会では家族の絆が薄れ、一人で住まざるを得ない多くの高齢者がいます。どの一人の人の人生もかけがえがなく、一人一人は神から限りなく愛されています。高齢の人々が歩んできた人生の苦労、家族や社会への貢献がねぎらわれ、残りの生涯を神へと向かう人生の完成の時と受け止め、生き生きと過ごすことができるよう教会や社会がふさわしく支援し、世代を超えた豊かな交わりにあずかれるよう祈りましょう。

短歌

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



檸檬な太陽が闇に帰る頃ちりんちりん風鈴わらふ

青梅 重吉 知美

【評】 厳しい暑さが続いている。朝からじりじりと照り付ける太陽を「檸檬な」と手に負えぬ動物のように表現。日没の後、ふと鳴り出す風鈴の音のオノマトペから涼しい風が感じられる。「わらふ」には安堵(あんぶ)にもじむ。

主イエスの母なるマリアも幼き日母なるアンナの胸に抱かる
人間学の授業で論じし『海と毒薬』心もやまのままと終へたり
夕顔はしずしず土を持ち上げていつかは咲ける時を待ちいる
絵ガラスに初夏の陽映す聖堂に遺影の友はやさしく笑ふ
梅雨明けを知らせてくれる立葵上まで咲けば麦藁帽子
民の辺に埋葬せよと望まれて前教皇もまた「道である」
今はもう達者なところは口だけと自認しつつもラジオ体操
旅先に教会を訪ねる楽しみはマリア像に捧げる祈り
「ひまわりの水やりボクは心配」とどこへも行かざる夏の少年

福岡 三谷 淑美
長崎 荒井 慎一
名古屋 富井 弘光
秋田 進藤八重子
東京 藤木倭文枝
川崎 印出美由紀
東京 千葉 明子
豊橋 赤沢 進
秋田 畑山真理子

俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎梅雨最中花に水やる日は続き
【評】 空梅雨の様子を実感として捉えている
◎鈍き空はね返すかにチューリップ
【評】 曇天の中のチューリップが美しく描けた
夏の月八十路を生きる祈りつつ
雨蛙小さき黒目何を見る
父の日や手酌の卓に旅行券
子は大事親も大事や桜桃忌
群生の棟の花や廃線路
花びらの渦の流るる春疾風
ふるさとになりて秦野の蕎麦の花
目に留まる一瞬ごきぶり金縛り
主日ミサアネの薔薇とベビーカー
遠山に心整ふ夏の空
藤椅子に幽けき祖父のすがた見ゆ
父つくる紫煙の輪つか濃紫陽花
六月の初聖体の子輝かし
旅先で与る弥撒や露涼し

川崎 吉田千津子
吹田 野村 愛子
豊橋 赤沢 進
春日井 遠藤 晶子
蓮田 向田 良子
秋田 進藤八重子
芦屋 平田ひろみ
豊中 成瀬きよみ
秦野 小泉早由美
府中 荒井 美邦
日野 広山 弘子
佐世保 川口 栄子
福岡 三谷 淑美
東京 草間をり絵
調布 田邊 久義
選者 吟

訃報

伊勢美繪子（みえこ）修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会） 7月19日、札幌市内の病院で心不全および腎不全のため逝去。89歳。1936年北海道生まれ。63年同会入会。66年初誓願。72年終生誓願。初誓願宣立後、北見藤女子中学・高等学校および藤女子大学・短期大学で41年間、事務職員として全力を尽くして働いた。定年退職後は8年間にわたり、旭川、北見と苫小牧のマリア院で共同体の院長や責任者を務めた。10年前からは、札幌マリア院（以上北海道）で晩年まで過ごしていた。本人の責任感や忠実さは仕事だけでなく、共同生活や祈りにも表れていた。大学祭のためにたくさんの手芸品を、祝いの時には修道共同体のために美しいカードなどを上手に作って協力することもあった。我慢強く、自分のためには何も求めることなく、優しいほほ笑みを保って周囲の人々によく感謝の気持ちを表していた。

乾（いぬい）盛夫神父（オブレート会） 8月7日、誤嚥（ごえん）性肺炎のため逝去。90歳。1935年徳島県生まれ。55年同会入会。58年初誓願。61年終生誓願。64年司祭叙階。古賀（福岡）、鳴門（徳島）の教会と幼稚園で長年奉仕した。幼稚園の園長も務め、対話を大切にし、モンテッソーリ教育を通



して子どもたちや職員を大事にしてきた。生き物や植物を世話することが趣味だった。司祭叙階60周年のダイヤモンド祝に当たっては、「私に伝えられたことを伝えていく。そのために私は叙階された。いつも思うがこれは本当に不思議。偉いことでも何でもない」と話していた。

小川スミエ修道女（純心聖母会会） 8月7日、老衰のため逝去。94歳。1931年長崎県生まれ。同会の初代会長・江角ヤス修道女が原爆で灰となった純心高等女学校（長崎）の校舎の復興を誓い、原子野から長崎県大村市の仮校舎に移転していた時、学生志願生として入会した。戦後の貧しさの中、40人ほどいた志願生たちと共に、修道女たちの苦勞と祈りの姿を身近に見て、修道生活への憧れを深めたと本人は述懐している。54年初誓願。63年終生誓願。初誓願後、同会が設立した鹿児島、長崎、東京の学園で教職に就き、また、志願生の養成にも携わった。教職を退いてからは東京・石神井（しゃくじい）の黙想の家で奉仕。やがて第三修練の養成を担当するなど、どの仕事にも一筋に取り組んだ。2005年からは静養の傍ら修道院内で奉仕した。思いやり深く優しい口調で語った。卒業生や関わる人々に慕われ、手紙での宣教を続けていたが今年の4月に入院し、8月7日、静かに御父のみもとに召された。



告知板

■東京

▶青年の祈りのひととき 9月19日（金）午後6時30分、コングレガション・ド・ノートルダム修道会調布修道院。祈り、分かち合い、茶話会。対象＝18歳（高校生は除く）～35歳でカトリックの祈りや信仰に心が向いている人（宗教不問）。参加司祭＝小田武直神父（東京教区）。下記QRコードから要申し込み。電話 080-8259-0993 東京教区教皇庁宣教事業 田所



▶写教の会（その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い） 9月21日（日）午後4時30分～5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰＝高橋登志子修道女（聖心会）。持参する物＝筆ペン、文鎮、下敷き30×50㌢（フェルトまたは新聞

紙）。9月18日（木）までに要参加申し込み。500円（自由献金）。✉phostere@gmail.com 古賀

▶東京多摩いのちの電話「支援ボランティア講座」 9月27日（土）午後1時30分～4時30分、丘の上ホール（日本キリスト教団国分寺教会／国分寺市）。支援ボランティアとしての活動前に受講必須の講座。講義、活動説明、懇談。対象＝「東京多摩いのちの電話」の趣旨に賛同し、想いをもって支援する人。9月17日（水）までにウェブサイト（下記QRコードからアクセス可）、氏名と電話番号を明記しメール（tama@tamainochi.com／件名「支援V講座希望」）、または電話（042-328-4441／平日午前10時～午後3時）で要申し込み。定員20人。1,000円（資料代・運営費等含



む）。電話 042-328-4441（平日午前10時～午後3時） 東京多摩いのちの電話事務局

■千葉

▶土曜講座「教皇レオ14世について」 9月13日（土）午後2時～3時30分、カトリック船橋学習センター・ガリラヤ講座室またはオンライン。講師＝柴田弘之神父（聖アウグスチノ修道会）。ウェブサイト（下記QRコードからアクセス可）、あるいは氏名、電話番号、希望講座名を明記し、メール（galilea@agadio.ocn.ne.jp）、電話（047-404-6775）、ファクス（047-404-6778）または郵送（〒273-0011 船橋市湊町1-2-21 ケイ・ジビル301 カトリック船橋学習センター・ガリラヤ）で要申し込み。無料（寄付歓迎）。電話 047-404-6775 ガリラヤ



■長野

▶清泉こどもラボ「子育て・親育ち講座」 「今こそ、子どもの言葉を育てましょう」 9月13日（土）午後1時30分～3時30分、清泉大学上野キャンパスクリスティーナ館。講師＝山根基世（アナウンサー）。9月5日（金）までに下記QRコードから要申し込み。定員80人。無料。電話 026-295-1325 清泉大学短期大



学部地域連携センター

■兵庫

▶教会で落語を！ 三日月の会 9月13日（土）午後2時、芦屋教会。出演＝桂源太、桂天吾、笑福亭喬路。3,000円（KBH友の会会員2,500円）。電話 078-252-1966 KBH（神戸バイブル・ハウス）支援委員会

▶日本聖書協会後援聖書セミナー「ヨハネの黙示録を味わう：豊かな福音の表現を伝える正典最後の書物」 9月18日（木）、25日（木）午後1時30分、神戸バイブル・ハウス（神戸市）。講師＝小宮山愛爾（あいじ）（神戸ルーテル神学校講師）。各回1,500円（KBH友の会会員各回1,000円）。電話 078-252-1966 一般社団法人クリスチャンセンター神戸バイブル・ハウス（KBH）

■福岡

▶三浦光世・綾子『愛に遠くあれど：夫と妻の対話』（講談社文庫）読書会 9月6日（土）午後2時～4時、福岡黙想の家入口カトリック案内所（宗像〈むなかた〉市）。無料。参加予定の方は要事前連絡。電話 090-6420-1783 「キリスト教と文学」読書会グループ 戸上（とがみ）

■司祭叙階■

◆イエズス会 9月27日（土）午後2時、麴町教会。受階者＝グエン・タン・アン。電話 03-3262-0282 イエズス会管区本部

番組

ラジオ心のともしび

（朗読・坪井木の実）
9月の放送日と執筆者 1日（月）西田仁・2日（火）片柳弘史・3日（水）熊本洋（よう）・4日（木）下窄優美（しもさこ・ゆうみ）・5日（金）萩原久美子・6日（土）古橋昌尚・8日（月）湯川千恵子・9日（火）服部剛（ごう）・10日（水）越前喜六・11日（木）三宮麻由子・12日（金）こいずみゆり・13日（土）山本ふみり・15日（月）今井美沙子・16日（火）竹内修一（おさむ）・17日（水）堀妙子・18日（木）許書寧（きょ・し

ゆにん）・19日（金）森田直樹・20日（土）コリーン・ダルトン・22日（月）植村高雄・23日（火）古川利雅・24日（水）中井俊已・25日（木）村田佳代子・26日（金）松浦信行・27日（土）岡野絵里子・29日（月）崔友本枝（ちえー・ともえ）（以上テーマ「教皇フランシスコ」・30日（火）山本久美子（知恵を活（い）かす））。

ホームページ（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。詳細は電話 075-211-9341。



お知らせ

「訃報」と「告知板」欄のご利用について

郵送とオンラインで情報をお送りいただけます。送り先は、〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館4階 カトリック中央協議会広報部広報課 「訃報」係または「告知板」係まで。

◆訃報は、①亡くなった司祭・修道者のお名前 ②所属（修道会名等）③逝去された日 ④年齢 ⑤経歴・お人柄等と写真一をお送りください。オンラインの申し込みフォームには右QRコードから。

◆告知板の情報は、①行事名 ②主催者 ③開催年月日 ④開催場所 ⑤料金 ⑥内容（講師名、参加費、対象、申し込み締め切り日、開始・終了時間など）⑦申し込み者の連絡先一をお送りください。スペース等の都合で掲載できない場合があります。オンラインの申し込みフォームには右QRコードから。毎月10日締め切り。

